

本日 東京医科歯科大学を卒業される皆さん ご卒業 誠におめでとうございます。

また、入学以来、長きにわたりご支援をいただいたご家族及び関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。そして本日は、各同窓会長並びに吉澤前学長にもお越しいただき、改めてお礼申し上げます。

昨年10月に完成したC棟のロビーなどで、仲間と共に勉学に励んでいる皆さんの姿をみると、パンデミックがようやく収束し、コロナ前の日常が戻ってきたことを実感するとともに、改めて本日、無事に卒業式を挙行できることを心より嬉しく思います。卒業に当たり、本学を代表して私から皆さんに3つのお願いを致します。

今年は元日から能登半島地震が発生し、大変な被害で多数の方が被災し、犠牲となりました。現在も通常の生活には戻らず、苦しい状況に置かれている方々が多数おられる中、本学からは医師や看護師、救急救命士など多職種で構成されたチームの職員27名が現地で支援活動を行いました。彼らは、インフラが復旧しない過酷な環境の中で、医療支援を行い、被災者のために献身的な活動を行いました。被災地に行った職員が所属する部署においては、残された職員が一丸となって業務を行うことで、間接的に支援を行い、今の自分たちにできる最大限のことを行っています。

今回の能登半島地震への派遣においても、本学のコロナ対応においても共通して言えることですが、我々は「世のため人のため」という、普遍的な価値を皆が共有し、その「普遍的な価値」が、職員を一つにし、それぞれの専門領域を超えた協力体制に繋がりました。

本学の学生は、皆、医歯学、医療に携わるための教育を受けています。医歯学・医療の多様化に伴い、その関わり方は様々ですが、根底に「世のため人のために」という思いがあることを忘れないで頂きたいのです。

これが第一のお願いです。

ところで皆さん大学生活をやり切ったという充実感があるでしょうか？

本日卒業される皆さんは、大学生活のうちの半分以上はコロナ禍であったと思います。コロナ禍で失われた大学生活の機会は戻らない。楽しみにしていた海外実習に行けなかった…課外活動も十分ではなかった…皆さん思うところは多々あるかもしれません。例年の卒業生以上に、不完全燃焼という気持ち、本来はこのように過ごしたかったという後悔を持つ人が多いのではないかと思います。

しかし、皆さんには過去を悔やむのではなく、教訓を見出し未来を創りだしてほしいのです。人生100年時代と言われる今、皆さんの場合は、女性は4人に3人、男性は2人に1人が100歳まで生きると予測されています。皆さんには、失われた機

会を取り戻すことに拘るのではなく、よりよい形で新たな機会を創出することに重きを置いていただきたいと私は思います。これが第二のお願いです。

卒業後、皆さんが進む道は様々であると思います。社会人1年目として、当面は、慣れないことも多く、自分でも「不甲斐ない」と思うことが多いのではないかと思います。しかし、それらを失敗ととらえるのではなく、環境への変化、すなわち進化のプロセスと考え、試行錯誤を恐れず個人としてのチャレンジを続け、後悔しない人生を歩んでいただきたいと思います。

日進月歩発展する医療において、学びに終わりはありません。東京医科歯科大学は、生涯教育の時代だからこそ、医療者として、人間として成長を続ける皆さんにとって、また戻ってきて学べる場、更に成長できる場でありたいと考えています。先にお話ししたように、人生100年時代には、大きな科学の進歩があり学問体系を新たに学びなおす必要に迫られる可能性が高いと思います。

東京医科歯科大学は皆さんの母校です。母校とは、母港、母なる港でもあります。船は母港で整備を終えて長い航海に出ていき、次の航海に備えるために母港に戻ってきます。名前が変わってもこの地に母港があることに変わりはありません。

本学は10月には東京工業大学と統合します。多様な見識を持つ仲間が増えることで、新たな医療価値を創出し、これまで以上に社会貢献をしていくチャンスが増えると考えています。学びなおしが必要となった時には、ぜひ母校に戻り更なる挑戦を続けてください。これが3番目のお願いです。

再度まとめると、第一は、「世のため人のために」という普遍的な価値を意識のどこかに持つこと、第二は過去から教訓を引き出し未来に向かうこと、そして最後は学びなおしの際には母校に戻ってきてほしいこと。これは私からのお願いというだけでなく、皆さんが幸せな人生を送るための、私からのアドバイスでもあります。

その母港を守る教職員一同、皆さんの幸せな将来を祈念しつつ、お祝いの言葉と致します。本日は誠におめでとうございます。

2024年3月14日

東京医科歯科大学 学長 田中 雄二郎